

2023年6月16日

立教大学国際学術研究交流制度
2023年度「招へい研究員」報告書

1. 招へい概要

受入 教員	所属・職	文学部・教授
	氏名	伊藤 実歩子
受入学部・研究科・研究所		文学部
招へい 研究員	所属・職	Director/Editor, UniverseHistory, ORF (Österreichischer Rundfunk) 所属機関所在国：オーストリア共和国
	氏名	Judith BRANDNER
招へい期間		2023年5月15日～2023年6月4日(21日間)
研究経費		678,200円

2. 滞在中の活動

来日および離日を含め、滞在中の活動を記入してください。全日程（毎日）記載する必要はありません。
講演会やセミナーなどを開催した場合はタイトル、会場、参加者数等を記載してください。

活動内容記入例) ○○について研究討議、共同研究、講演、講義、大学院生への研究指導等

年月日	活動内容
2023年5月15日	来日
2023年5月17日 18:00~19:30	人文研究センター主催シンポジウム 「Hiroshimaを伝える——海外メディアと被爆者の証言」20名。 ロイドホール5階人文研究センター
2023年5月25日 13:00-15:00	「Fukushimaを語ろう——学校教育とFukushima」13名。3年次演習。 X308教室。
2023年5月31日 18:00~19:30	立教大学ボランティアセンター主催20周年記念事業シンポジウム 「Fukushimaは世界でどのように報道されているか」 D501教室。オンライン、対面同時開催。オンライン約80名。対面約40名。
2023年6月9日	離日（私費による滞在延長）

3. 研究・交流状況および成果

上記に記載した活動について、具体的な研究・交流の内容および成果を、本学の学術研究、教育活動、国際交流の進展へ与える効果を含めて、記載してください。講演会やセミナーなどの参加者層（学生、大学院生、一般、教職員等）、会場の様子なども記載してください。

1. 人文研究センター主催シンポジウム「Hiroshima を伝える——海外メディアと被爆者の証言」

本シンポジウムは、ブラントナーのこれまでの Hiroshima 研究の一端を、彼女に影響を受けて文化人類学的視点からヒバクシャの研究を行うようになった愛葉由衣さんとともに検討した。参加者は、文学部の学生、大学院生が多かった。

2. 「Fukushima を語ろう——学校教育と Fukushima」

3 年次演習の時間を延長して、ブラントナーのレクチャーを実施。その準備として、ゼミでは、東日本大震災に関連する教育実践記録や文部科学省から配布されている放射能副読本、新聞記事などを活用しながら、学生それぞれの震災後の教育について振り返る機会をもった。

演習では、1. のシンポの後に取材した福島の様子も聞いたり、ブラントナーの著作（事前学習済み）のその後の展開を聞いた後、学生から質問が多く出た。特に、オーストリアからなぜ遠いフクシマの取材を続けるのかという問いに対して、ブラントナーは、フクシマは遠いところで起こっていることではなく、1980 年代のチェルノブイリの問題、ウクライナ戦争におけるサボリージャ原発攻撃の問題などを例に挙げ、オーストリアあるいはヨーロッパの人々にとっても身近なことであることを強調した。

大学の最初の 2 年間でコロナ禍で過ごした学生たちには世界的視野で物事を考察する視点が不足している。そうした中で、ブラントナーとの対話は、日本の深刻な社会問題を、世界的視野でとらえなおし、自分事としてとらえる機会になったと考えている。

3. 立教大学ボランティアセンター主催 20 周年記念事業シンポジウム

「Fukushima は世界でどのように報道されているか」

本シンポジウムは、オンライン、対面ともに学生だけでなく、学外者の参加が非常に多くあった。このテーマが広く一般市民の間にも関心を持たれているということが分かった。

ブラントナーは、まず、欧州における Fukushima に関する報道の質的・量的違いについて詳細に検討を行った。すなわち、原発を所有するイギリス・フランスでは福島原発事故の報道はあまり多くなかった、またすぐ報道されなくなったのに対し、オーストリアを含むドイツ語圏では比較的頻繁かつ長く報道され、またそれをきっかけに全原発停止という政策決定がなされた（ドイツ）といった大きな違いがあった。こうしたことは、これまで日本においてもあまり明らかにされてこなかったことだと考えられる。

シンポジウムでは、これまでのブラントナーの Fukushima の取材の総括的なレクチャーに加え、福島の作曲家による「フクシマレクイエム」、ウィーン在住の日本人現代アート作家とのコラボレーション作品も紹介された。また、この二人がオンラインで登場したことで、オンライン、対面開催の良い点が強調されたシンポジウムの形態であったと考えている。

ブラントナーの講演は、単に研究者による学問的なレクチャーにとどまらない視点がいくつもあった。例えば、日本の社会問題を海外の視点で見ると全く違った風景にも見えること、社会問題はアートのテーマになること、そうしたものを見て、聞いて、思いを寄せることで社会問題に対する多様な視点を参加者が獲得することができた能動的なシンポジウムであったと考えている。

今回の一連の企画は、事前に意図したわけではないものの、ロシアによるウクライナのサポリージャ原発への攻撃に対する世界的不安、あるいは広島で開催された G7での各国首脳による広島平和記念館の訪問などと重なり、立教大学文学部およびボランティアセンターがこうした問題に対する研究に取り組み、その成果の一端として広く社会に公開することができたことはとても意義あることだと考えている。